

65 大崎の 神をばまの小浜は 狭せばけども 百船人ももふなびとも 過ぐとはなくに

神が鎮座する大崎の小浜は(三方が山に囲まれ)狭いけれども多くの船頭達は直ぐに過ぎて行かないで立ち寄って行くのに (6-1023) (石上乙麻呂)

この歌は石上乙麻呂いそのかみおとまろまへつみき卿 土佐国に配流されるときの歌三首(6-1019 1020-1021、1022)の反歌です。「流人である自分だけはあわただしく船出しなければいけない」という心境が裏にあります。大崎港の外海は紀伊水道の潮の流れが速い荒海、その上この付近台風銀座、従って北、東、西三方 山に囲まれた静かな入江である大崎港は避難場所として重宝がられ、信仰心も厚く神の住む浜としてあがめられたものと思います。入江には弁天島という小さな島があり、近くには悪天候、おおしけの海を江戸にみかんを運んだ紀伊国屋文左衛門船出の石碑が立っています。

天平11年(739)、石上乙麻呂卿が土佐に流された理由

橋本編、No. 13でも記述しましたがそのわけをもう少し詳しく述べておきます。

続日本書紀によると「石上乙麻呂、久米連若売くめのわらじわかめ奸する罪にあに坐りて土佐国なに配流わかめさる。若売は下総国に配さる。武門の誉高い名門物部氏の直系で風貌よく当代有数の文人、石上乙麻呂と当代切つての実力者藤原宇合うまかいの未亡人で当時宮中に奉仕していたとみられる久米若売との恋愛事件は、都人の間で格好の話題となり、帝の怒りに触れ配流の身となりました。但し、二年後、大赦で無事帰還しました。(紀伊国万葉歌碑散歩;佐々木政一著、下津町教育委員会資料より)

66 大崎の 荒磯の 渡り延はふ葛くずの 行方も無くや 恋ひ渡りなむ

大崎の荒磯の辺りに延び広がり這う葛のように私の恋は行方も定まらず恋し悩み続けて行くことだろう (12-3072) (読人不詳)



みかん畑より大崎漁港を撮影 01/10/26



大崎漁港と集落 01/10/26



大崎漁港近影 01/10/26



大崎の荒磯・・・の歌碑の立つ場所、和歌ノ浦、
双子島、加太、淡路島一望 01/10/26

「大崎の荒磯の渡」について

『古義名処考』によると「紀伊国海部郡にありて、よき港なり。浜に人家ありて、遊女なども居り、往来の船、大方この港につく。今も土佐の船の往来に常に泊まる所なり。古も土佐にかよふには、かならず此の大崎を通りしならむ」と記されている。（「下津町万葉歌碑めぐり」より）現在、道路が整備され大崎に行くには便利になりましたが今から40年頃前まで陸の孤島といわれ、通勤や通学のための連絡船（ぽんぽん船）が大崎港から下津港に就航していました。

40年ぶりに大崎を訪れた感想

とにかく大崎、塩津周辺の景色は美しい！！、快晴の10月25日、ワイフと散策してみたがあまりに素晴らしいので、もう一度翌26日、一人でカメラと双眼鏡を持って行ってきました。但し一部弁天島後方の岬の山が削られて石油備蓄タンクが設けられ景観が非常に悪くなっていた。どうしてあのような場所に莫大な資金を投じて備蓄タンクを作ったのかその理由をききたい。わざわざ開発しなくとも付近に石油製油所跡の広大な遊休地があるのに残念だ。とにかく和歌山というところは無茶苦茶だ、水軒の浜や海南の黒江、名高の浜、冷水の浦を埋め立てしまおうし、又その後それらの土地が有効に活用されていれば文句の付けようもないが十分生かされていないし、一部の企業は和歌山から撤退する話もでているし、一体どうなっているの。

『大崎の荒磯・・・』の歌碑のそばのベンチでおむすびを食べました。付近にはたばこの吸い殻や空き缶がありましたのでできるだけゴミを拾い持ち帰りました。ちなみにやっちゃんはタバコは吸わない。

67 ^{あて}安太へ行く ^{をすて}小為手の山の ^{まき}真木の葉も 久しく見ねば ^{こけむ}蘿生しにけり

有田へ越えて行く所に生えている小為手の山の杉の大木よ、しばらく見ないうちに苔が生して来たなあ～ 読人不詳（7-1214）

海草郡下津町小畑「拝ノ峠」あたりという説と有田郡清水町押手という説がある。前後の歌、熊野古道から推察して私は前者説を採用、但し清水町は良材の産地で美しい蘭島のタナ田を全国

の万葉ファンにお見せしたいので清水町蘭島^{あらぎじま}タナ田の写真に記載しました。安太^{あて}とは紀伊国阿提郡^{あて}のことで大同元年(806年)に平城天皇の諱『安殿(アテ)』をはばかって「在田郡」と改められました、現在の有田市。小為手(サイデ^{いみな}orオステ)。ま木—まことの木、すぐれた木のことで良質の材木となる木、即ち檜、杉を指す



2001/06/10 有田川上流清水町蘭島(あらぎじま)の棚田 紀子妃殿下曾祖父様の里。

なお和歌の浦編48で記載した

「潮みたばいかにせむとかわたつみの神が門(と)わたるあま処女ども」

は下津町方の歌であるという説もあり、粟島神社の境内に郷土史研究家栗栖安一氏揮毫による歌碑が立っています。近くには紀州徳川家の菩提寺「長保寺」があります。

長保寺の歴史

長保寺は長保2年(1000年)、一条天皇の勅願を受けて性空上人^{しやうくうしやうにん}により創建されたと伝えられています。一条天皇には定子、彰子の二人の后が居ました。定子皇后のお付きの女官が「枕草子」を書いた清少納言で、彰子皇后のお付の女官が「源氏物語」を書いた紫式部です。これらの文学作品は一条天皇の長保時代の宮廷生活を題材として描かれています。長保時代は平安貴族の王朝文化が最も栄えた時代です。長保寺が創建された長保2年に定子皇后がお亡くなりになっています。長保という年号を名乗る寺の建立は一条天皇にとって特別な意味があったに違いありません。

本堂1311年、多宝塔1356年、大門1388年、鎮守堂1295年といったように主要な建物は鎌倉時代に再建されたものです。長保寺は天台宗として創建されましたがその後、法相、天台と変わり、現在あるお堂が再建されたころは真言宗のお寺でした。仁和寺から印玄という僧が来て本堂の再建を指導しています。

寛文6年(1666年)に紀州徳川家初代藩主頼宣公^{よりのぶ}により菩提寺に定められました。その時、頼宣と天海僧正の約束により天台宗に改められました。江戸時代に本堂背後の山の斜面に広大な藩主廟

所が造られました。周囲が山に囲まれ要害堅固である所から非常時紀州藩の陣地として利用できる
よう造営されました。 (長保寺パンフレットより)



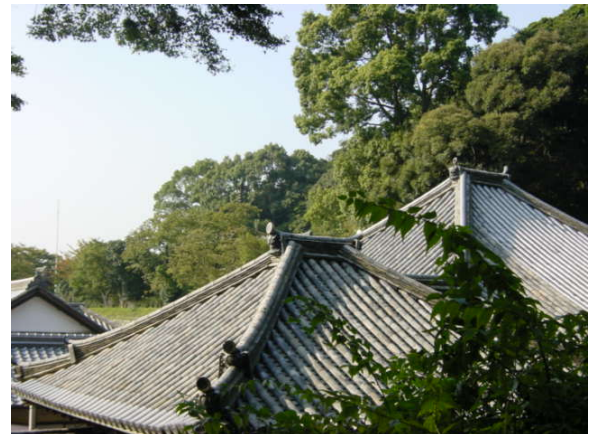
国宝 本堂 01/10/25



国宝 多宝塔 01/10/25



国宝 大門 02/03/39



長保寺の葺(いらか)

本堂、多宝塔、大門と三つそろって国宝である寺は、奈良の法隆寺と長保寺のみです。